

隣家の女

森野 水琴

彼は隣の家から新婚の挨拶を受けた。

隣の家の方は何度も顔を合わせていたが、新妻は実に初々しい。彼の心に春が来た。

毎日が、お花見のようなものになると彼は喜んだ。

夜になると、闇にまぎれて花を愛でるように黒い蝶が舞う。しばし羽を休めているのだが女は気づいていない。

翌朝、新妻は出勤する夫を見送っている。

黒い蝶は夜に備えて休んでいる。

新たな日常が始まる。

彼は暖かなまなざしで彼女を眺めている。

彼女が黒い蝶に気づいた。

黒い蝶が驚く。

とがめることもなく彼女は黒い蝶を眺めている。

安心した黒い蝶が舞う。

彼の肩に白い蝶が舞い降り、羽を休めている。

黒い蝶が受け入れられたことを知り、彼は微笑む。

一年後、隣家は長男の誕生に賑わっていた。

あとつぎが生まれて、彼女も安泰といった感じである。

彼が出産祝いを持参して隣家を訪ねると、彼女が応対してくれた。

彼女の新たな感性を開くかのように蝶が舞う。

さらに一年後、隣家に長女が生まれた。

彼は出産祝いを持参して隣家を訪ねた。またしても彼女が長女を抱いて応対してくれた。

彼の心に再び春が来た。

別の黒い蝶が長女の肩で羽を休める。長女は気が付かない。

彼と彼女は顔を見合わせて微笑む。

いつの日か長女が黒い蝶に気づくのを待ち望むかのように蝶が舞う。

十年後のある朝、隣家の長女が体調不良で学校を休んだ。

男が出勤、長男が登校、母と長女だけになると、長女は母に黒い蝶が見える  
と告白した。自分の肩にも、母の肩にも黒い蝶が見える。

母は長女に着替えるように促し、長女を連れて隣家を訪ねた。

彼の両肩に白い蝶。「この事は三人の秘密にしましょう」と言う母に、一同  
うなずく。

待ち望んだ日の到来を祝福して蝶が舞う。

夜になると、白い蝶が彼の肩から隣家を目指す。彼女も娘も黒と白の蝶が舞  
うのを眺め、声なき吐息で夜が更けていく。朝になると白い蝶は彼の肩に舞い  
戻った。

このことは三人の秘密のはずだった。ところが数日して、彼の長男が蝶に気  
づいてしまった。

彼の長男は、隣家の長男より一歳年上、隣家の長女より二歳年上である。最  
近になって隣家の長女に好意を抱き、何か贈ろうとして、肩の黒い蝶に気づい  
た。不思議に思い、父に相談しようとして白い蝶に気づいた。

父から蝶の意味を聞き、蝶が見えるということは、自分にも黒い蝶を贈るこ  
とができると分かった。だが意中の隣家の長女は既に黒い蝶を受け取ってい  
る。当分は、あきらめるしかなさそうである。蝶が見えるようになったこと  
は、男ふたりの秘密にしておくことにした。

夜になって、彼女と娘は黒と白の蝶が舞うのを眺めている。いくぶん激しく舞っているように見える。

彼女は黒い蝶の羽に、より黒い斑点を見つけた。彼からの合図に違いない。彼の長男が蝶に気づいたのだろうと察した。白い蝶の羽に、より白い斑点をつけて知らせることにした。

娘は気づかない。

彼は帰ってきた白い蝶から知った。長男には秘密にすることにした。

長男は黒い蝶を贈ることができない悔しさを、勉強に励むことで解消している。またたく間に学年で一番の成績になった。

その評判を聞いた隣家から子どもたちに勉強を教えてもらいたいと頼まれた。長男は快諾し、隣家に毎日教えるにいくことになった。